

加藤玄智博士の学恩を憶う

明治神宮
加藤玄智博士記念学会々々長

伊達 巽

去る五月八日は、加藤玄智博士逝いて早くも十年の命日に当り、同月十七日に加藤玄智博士記念学会の主催のもとに、国学院大学講堂に於て十年祭の記念講演会が催された。

当日は、令孫加藤清昭御夫妻を始め縁故の人々及び学生諸君も多数会同して、安津素彦、小林健三の両先生による感銘深い講演があつて加藤玄智博士在世の往時を沁々と偲び、感慨無量なものがあつた。

加藤博士は、先の太平洋戦争の空襲にあわれて、御殿場市の郊外東山の草深い処の仮寓を学務窟と号して余生を過して居られた。あの当時は何処も同様に物資食糧が極端に不足して生活に苦しんだ時代であつたが、先生は不幸にも失明せられたので、孤独な老先生の日常生活はお気の毒に堪えない状態にお見受けしたのであつた。けれども高潔な先生は依然として学究生活に徹して居られたことは、接する者の等しく感歎おかざる所であつた。幸なことには親戚に当られる杉浦千代女史が、看護婦の資格を持つ方で献身的に身辺の面倒を見てあげていられたので、先生は九十三才の天寿を完うせられることが出来たようにお見受けせられるのである。

先生は人も知る博覧強記、弁舌さわやかな方であったから、その秘書役をつとめて、あの早口の口述を筆記したり、外国語の勉強、そして頻繁な書翰を読んでお聞かせしたり、代筆したり、並たいていのことではなかったであろう。その上に日々の食事のお総菜など裏の焔で作らねばならなかったのだから身心共に並たいていのことではなかったこととお察しするのであった。

私がこの学労窟を屢お訪ねすることになったのは、明治聖徳記念学会の関係からである。抑明治聖徳記念学会の起原は、その会則にもある通り、「明治ノ聖代ヲ永遠ニ記念スルニ、万古不易ノ真理研究ヲ以テセントシテ起レル日本学会」であり、その目的は、「主トシテ人文史的学問ノ新研究ニ照シテ本邦思想ノ特色ト我カ建国精神ノ大本トヲ闡明シ我カ国体ノ精華ト日本ノ文明トヲ内外ニ顯彰シ以テ自ラ知ルニ努ムルト同時ニ日本文明ノ真相ヲ世界ノ学会ニ紹介シテ彼我ノ精神的理解ニ資セムコトヲ期ス」という高邁な理想を掲げて発足せられたものであった。

爾來同会の活動は、専ら加藤玄智博士を中心に四十年に余る長期に亙り、多大な業績を残されたことは周知のことである。

然るに敗戦は同会の存続も困難となり、当時印刷なかばで停頓していた『神道書籍目録』の統編の刊行事業を明治神宮に於て引継ぐことになったのであった。

そんな経緯から私は学労窟に屢お訪ねして先生の警咳に接する機会をえ格別のご眷顧を蒙ることになったのである。

就中、思出で深いことは、昭和三十九年二月二十九日附の先生の書簡と、手沢の『神道の宗教学的な新研究』

を寄贈せられたことである。その書簡には次のように書かれていた。それは末尾に病床代筆とあるから先生の口述を杉浦女史が書かれたものである。摘記すると、

さて私はこの機会をもって過去を回顧して明治神宮へ記念の為奉納いたしたき為別書をお手許まで御郵送します。私は御承知の通り東京帝大哲学科の出身で、しだいに世界の宗教の一般的研究に手を付け出し、後、神道講座等を受持つに至り、世界宗教中神道の研究を主とすることになりました。この結果を小著に寄せて発表したものが『建国思想の本義』『日本人の国体信念』です。今日から見ればもとより幼稚な内容に過ぎませんが、これがこの方面の私の処女作ですから貴文庫へ御奉納を申したい。なお出版の当時は明治天皇御在世中で陸士より献上申上げております。貴宮でもただいまこの歴史的文書を今、御受納下されば幸せ。なお貴台自家用にこの際記念のためお手許に御保存の上、時に御笑談たまわれば私としては過去の良き思出となり、明治天皇の御威徳を記念し奉るよすがとも相成ることと存じ、特に貴台にこの事をお願い申し上げます。本書も又私の宗教学に関する処女作で『神道の宗教学的新研究』であります。内容は今では不行きとどきなものではありませんが御受納下さい。右三冊は私も人生の辞退者と近々なるでしょうから、その時の御記念とも存じて居ります。まずは右要項まで。老生物故の後は生祠研究会を介して道の為御精進の程切願します。私の病氣もこの冬の厳しい寒さに負けないで肺炎にもならなくてすめばもう少し娑婆の空気で過されるかも知れないと医師は語っています。(以下省略)

とあって正に遺言状ともいふべき書簡で私は目頭が熱くなってしまうのであった。

私に寄贈せられたその手沢本には、随所に書き入れや新聞の切抜きが張りつけてあって、先生が常に座右に

おいて使用されていた本なのである。

特に大正十一年五月号の大正公論の切り抜き(十一頁)が挟んであった。それは「加藤博士の神道論に対する回答を読む」と題する河野省三博士の「神道と憲法の信教自由」に関する論駁文であった。河野省三先生は私の敬慕する国学院在学時代の恩師である。その当時両博士の間に活潑な論戦が取り交わされた模様が髣髴と偲ばれるのである。

尚因に、その頃学界に於て神社と宗教との関係、或は憲法と神社との関係についての論議が盛んであって、加藤玄智博士編で大正十年十月明治聖徳記念学会発行の『神社対宗教』には、当時の神仏基を始め宗教界、学界・官界の諸家三十四人の論説が編集せられていて、現在の神社問題研究にも重要な参考資料であることを思うにつけても、先生の学績は洵に大きいことを思うものである。

最近岡田米夫先生の談によれば、松下幸之助さんの提唱で『神道大系』の編集が企劃せられていることである。このことは、夙くも『神道書籍目録』姉妹二冊を、三十年の長きに亘って心血をそいで出版せられる遠大な理想であったのである。洵に近來明るい有難い朗報であって、加藤玄智博士も泉下に満悦のことと察せられるのである。今回先生の十年祭を記念して諸先生のご努力により紀要を発売せられることは、先生の学恩に報ずる意味に於て同慶至極である。又この企に対して積極的御協力を給わった各位に対して満腔の感謝を表す次第である。

昭和五十年十月